

森林総合研究所 交付金プロジェクト（平成26-28年度）
「ニホンジカ生息地におけるスギ・ヒノキ再造林手法の開発」

再造林地におけるニホンジカ 被害危険度の判定

—四国版—

四国と気候の類似した紀伊半島、九州地域でも、ご活用いただけます

シカ生息地で再造林を予定されている、みなさまへ

防護柵を設置するだけでは、完全にシカ被害を防ぐことはできません。
シカの「危険度」を現場で判定し、適切に防護柵を管理して、シカの
被害を防ぎましょう！



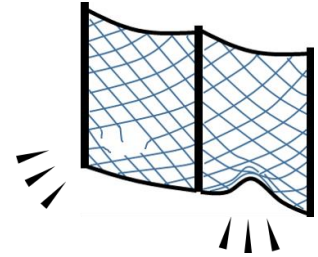
国立研究開発法人 森林研究・整備機構
森林総合研究所四国支所
高知県立森林技術センター

防護柵をしっかりと点検・修理してください

シカの食痕が数種類の植物でみられたら、入念に防護柵を見回ってください。1年に2回程度、状況によってはそれ以上の回数が必要かもしれません。台風や大雨の後などはもちろん、なるべく頻繁に防護柵を点検するように心がけてください。

— 防護柵を点検するときの注意点 —

- ① **遠くから目視または双眼鏡で見るだけでは不具合を発見できません**
防護柵を巡回しながらネットをかるく引っ張り上げ、地面との隙間や杭の抜けがないか確認しましょう。
- ② **ネットの上端のロープが垂れ下がっていないか確認しましょう**
防護柵の上をシカが飛び越えることがあります。
- ③ **ネットの小さな破れは早めに直しましょう**
小さな破れはそこにシカがやってきた証拠かもしれません。
放置して破損が広がると、補修費用も大きくなります。
特に冬になる前にはしっかりと補修しましょう。



防護柵のまわりでシカを捕獲することも検討しましょう

- 入念な見回りを続けても防護柵の不具合やシカの侵入が続く場合には、周辺のシカ頭数を減らす必要があるかもしれません。
- ハイキューブなどの乾燥牧草500gずつを林内や伐採地外周の数カ所に置いて、どの程度なくなるかを試してみましょう。2週間以内に9割以上がなくなるようなら、ハイキューブでシカをおびき寄せて罠いりなどで捕獲できる可能性があります。
- シカを捕獲する場合は法令を遵守して下さい。関係する法令や捕獲の具体的な作業手順などは、多くのパンフレットが出版されていますので、そちらをご参照ください。

広域的なシカ密度情報について、四国では以下のような資料が公表されています。

高知県「高知県第二種特定鳥獣（ニホンジカ）管理計画」 2017年4月1日公開

<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/070201/2015052800148.html>

徳島県「第4期徳島県ニホンジカ適正管理計画」 2017年3月31日公開

<http://www.pref.tokushima.jp/docs/2017031300076/>

愛媛県「第3次愛媛県ニホンジカ適正管理計画」 2017年3月6日公開

<http://www.pref.ehime.jp/h15800/12hogokanrikeikaku.html>



☎ お問い合わせ先

〒780-8077 高知市朝倉西町2-915 国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所四国支所

Tel: 088-844-1121 (代表), Fax: 088-844-1130, E-mail: koho-ffpri-skk@gp.affrc.go.jp

「再造林地におけるニホンジカ被害危険度の判定—四国版—」 平成29年10月発行

このパンフレットのねらい

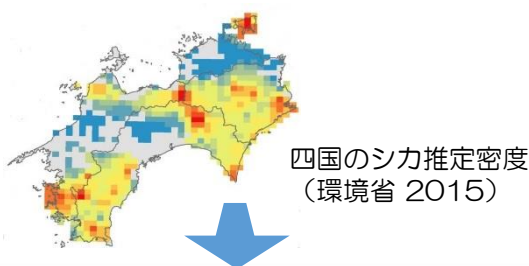
ニホンシカの生息地では、再造林地で防護柵を設置してもさまざまな要因によってシカが柵内に侵入し、多くの場所で苗木が被害を受けています。

このパンフレットは、林業に従事するみなさまが、再造林地のまわりの植生を観察することでシカ被害の「危険度」を予測し、「危険度」に応じた防護柵の管理方法を検討できるように手順をとりまとめたものです。

この冊子が再造林地のシカ被害の防止に役立てれば幸いです。

再造林地のシカ対策ワークフロー

①
広域的なシカ密度
の情報をチェック



公表されているシカの密度情報を利用し、シカが広域的にどれくらいいるか確認します。
(4ページに四国のシカ密度情報Webサイト)

②
再造林予定地の
危険度を予測
(3ページ参照)

ススキの生えた日当たりのよい再造林予定地のまわり

シカの食痕を
観察する

広域的な密度情報は古くなったり、局地的に異なる場合があります。そこで、まわりの植生の状態から危険度を判定します。

危険度Ⅰ

ほとんど
みられない

危険度Ⅱ

数種類の植物
でみられる

植物がシカに食べられた跡* (食痕) を観察して、危険度を2段階で判定します。

③
危険度に応じた
シカ対策を検討
(4ページ参照)

防護柵を設置
通常の見回り

防護柵を設置
入念な管理

防護柵を設置し、危険度に応じて防護柵の管理をしましょう。

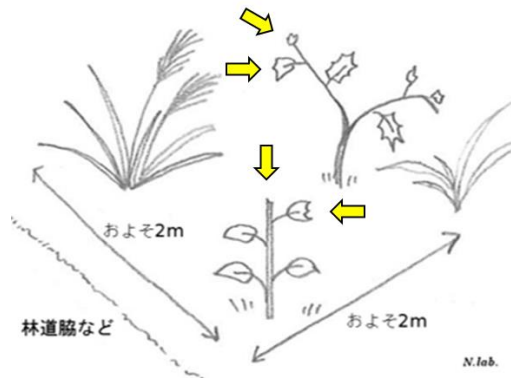
防護柵内への侵入が止まらなければシカの捕獲を検討しましょう。
(4ページ参照)

食痕をみることでシカ被害の危険度を予測できます



←こんなところで調べます
(赤枠は調査区のイメージ)

シカの食べた跡を探します→



シカが生息している場所ではさまざまな植物にシカが食べた跡※（食痕）が残ります。

- ① 9月～10月、ススキの生えているような日当たりのよい林道脇の、2m四方の範囲内で植物を観察して、シカの食痕をさがします。枝先や葉先がちぎれているのが特徴です※。
- ② アザミやイチゴなど2、3種類の植物にシカの食痕があれば要注意です。5～7種類（出現種全体の25%）に食痕があれば頻繁にシカが来ています。植物の名前はわからなくても、別の種類の植物だとわかるだけで大丈夫です。
- ③ 場所を変えて5回ほど同じように調べます。どこでも2、3種類以上の植物で食痕が見つかるなら、防護柵の入念な保守・点検が必要になります。

※ 以下のWebページでシカに食べられた植物（食痕）の写真を公開しています。

森林総合研究所四国支所 <http://www.ffpri.affrc.go.jp/skk/>

どうして危険度がわかるのか？

高知県の林道脇などで植生調査をおこない、植生の状態とシカ生息密度の関係を調べました。その結果、シカの食痕がある種数の割合から、シカの生息密度を推定できました（右図）。ひとつの植生調査区には20～30種ほどの植物が記録されます。このうち、10%にあたる2、3種類に食痕があれば、最大で10頭/km²強のシカがいることになります（図中の青矢印）。シカ生息密度がこれより大きくなると、防護柵がうまく機能しなくなる可能性が高くなります。なお、この方法は四国の太平洋側の標高1000mより低い所での調査をもとにしています。

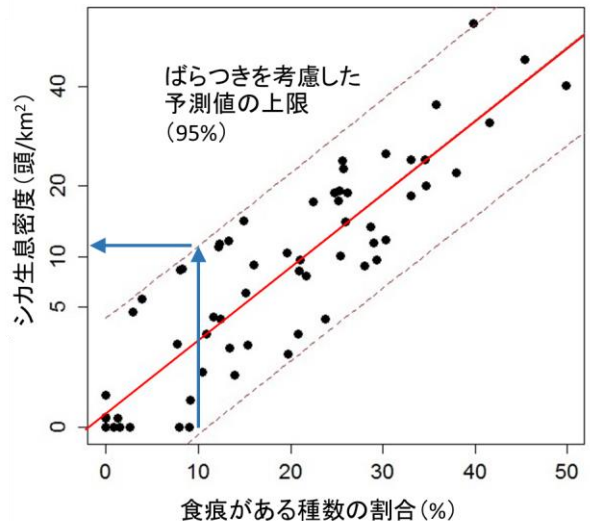


図. 食痕のある種数割合とシカ生息密度との関係